

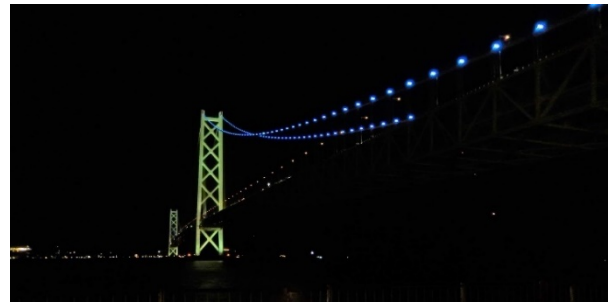
## 世界人道デー2017 記念イベント



8月19日は「世界人道デー」です。世界各地で頻発する紛争や自然災害等の人道危機で生命や尊厳がおびやかされている人々や、そうした現場で支援活動に携わる人々に心を寄せる日として、国連総会によって定められました。

武力紛争の際、戦闘当事者は国際法に基づいて一般市民や人道支援要員を保護する義務を負います。しかし実際には、多くの民間人が戦闘に巻き込まれる中、病院や学校といった施設やエイド・ワーカー自身が攻撃の対象となる状況が深刻化しています。そこで2017年の世界人道デーでは、「#NotATarget (標的にするな)」を合言葉に、オンラインキャンペーンを世界規模で展開し、紛争下での民間人と人道支援要員の保護を訴えました。

また日本ではこの日に合わせ、JICA関西及び学生グループの国連フォーラム関西と記念イベントを開催しました。神戸でのイベント開催は、今年で5回目となります。そして今年もサイドイベントとしてライトアップを実施しました。神戸ポートタワー、錨山、モザイク大観覧車、フラワーロード、遊覧船ファンタジー号と明石海峡大橋が国連ブルーに染まり、大観覧車には「8月19日は世界人道デー」の文字も浮かび上がりました(動画)。



今年の神戸イベントのテーマは「人道課題への私たちの挑戦～人道支援のニーズを減らすには」。国連事務総長が世界人道サミットを機に発表した「人道への課題」で掲げられている「届ける支援から人道ニーズ解消に向けた取り組み」について私たちに来ることは何か、議論を深めようという企画です。学生さんや社会人など80名を超える方々にご参加頂きました。



冒頭のイントロダクションでは、このテーマの背景と意義について、お二人の専門家にご登壇頂きました。

まず関西学院大学助教の赤星聖(あかほし しょう)さんには、世界人道サミットと「人道への課題」、そして人道ニーズを低減させるための取り組みについて解説頂きました。(発表資料は[こちら](#))

続いて、外務省緊急・人道支援課長の長徳英晶(ちようとく ひであき)さんには、日本政府による国際人道支援の方針や、世界人道サミットで表明した政府としての貢献等について、南スーダン難民支援等の事例を交えながらお話し頂きました。



続く第一部では、人道支援に携わる人々や実際の活動について理解を深めるため、4人の専門家にお話を伺いました。



まず最初に JICA 緊急援助隊 (JDR) 事務局職員の湊祐介 (みなと ゆうすけ) さんから、主に JDR 派遣を通じて JICA が実施している国際貢献についてお話し頂きました。特に、地震等の際に生存者の救出にあたる都市型捜索救助、医療、感染症対策チームなどについてご紹介いただきました。突発的な災害発生後にいち早く現地に入って被害状況の調査や各国チームの調整にあたる国際災害評価調整チーム (UNDAC) のメンバーでもある湊さんに、支援現場の写真や経験談も交え、臨場感あふれる発表をして頂きました。(発表資料は[こちら](#))

続いて、再び外務省緊急・人道支援課長の長徳さんにご登壇頂き、国際緊急援助における外務省の役割について発表頂きました。日本政府が行う国際緊急援助や、国連人道問題調整事務所 (OCHA) を含む国際機関を通じた支援等、具体的に分かりやすくお話し頂きました。また、国際的な人道原則や OCHA が担う人道支援のための民軍調整等、日本政府として重視しているポイントにも触れて頂きました。

NGO の日本国際民間協力会 NICCO 職員である大豊盛重 (おおとよ もりえ) さんには、2013 年にフィリピンを襲った台風ハイヤンでの支援活動の実例をご紹介頂きました。特に小規模な NGO として活動する際のメリットや困難について具体的にお話し頂きました。被害が広範囲に及び、続々と到着する大規模な支援機関がひしめく中、どのように現地にたどり着き、支援地域を決めるのかといった実際の課題にも触れて頂きました。



最後に再び関西学院大学の赤星さんにご登壇いただき、国連や NGO といった多様なアクターが、緊急人道支援の現場でどのように調整をおこなっているのかについてご説明頂きました。特に世界食糧計画 (国連 WFP) や国連難民高等弁務官事務所 (UNHCR)、OCHA といった国連人道機関のそれぞれの役割や、クラスターと呼ばれる分野毎の調整メカニズム等、再びフィリピンの台風ハイヤンを例にわかりやすくお話し頂きました。(発表資料は[こちら](#))



第二部では「人道危機への私たちの挑戦」と題して、参加型のワークショップを行いました。紛争、貧困、格差といった課題を抱える架空の島国「コフカランド」で大規模自然災害が発生したというシナリオを用いて、参加者全員が国連機関、外務省、JICA、NGO のいずれかのテーブルに分かれ、どんな支援が必要かをシミュレーションしました。そして久木田純さん (元ユニセフ職員・現関西学院大学教授・国連

フォーラム共同代表)、澤田秀貴さん (JICA 関西職員)、渡部正樹 (OCHA 神戸事務所長) がアドバイザーとしてそれぞれのテーブルを廻り、第一部の登壇者とともに議論をサポートしました。膨大な情報量に圧倒され、時間に追われながらも、活発な議論が交わされました。イベント後のアンケートからも、「面白かった」、「もっとしたかった」等の声が多く寄せられました。



イベントの締めくくりに、参加者全員で「#NotATarget (標的にするな)」のスタンドアップを行いました。撮影された集合写真は、#NotATarget キャンペーンの一環として SNS 上で世界中に拡散されたほか、OCHA 本部が配信した[キャンペーン動画](#)でも紹介されました。

今年のイベントは初めて学生グループ、国連フォーラム関西との共催となり、特に多くの若い方々に参加して頂きました。各専門家の発表だけでなく、そこで学んだことをベースに自分たちでも考えてみるという参加型のワークショップを通じて、遠いところで起こっている人道危機を「自分事」として考えて頂く機会を提供できたのではないかと考えています。ご協力、ご参加頂いた皆様、ありがとうございました。



<関連リンク>

[OCHA 本部ウェブストーリー：世界各地の世界人道デーの様相（英語）>>](#)

[OCHA 本部作成動画：世界各地の#NotATarget スタンドアップ>>](#)